OUMC

大阪大学山岳会 会報
No.11
2009年6月

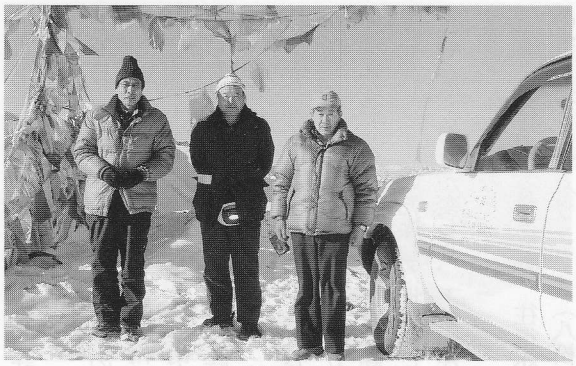
発　行　大阪大学山岳会
〒562－0031　箕面市小野原東4－19－45
大野義照方

チベット周遊2400キロ
ランドクルーザーの旅

還暦を過ぎても元気いっぱいの出雲路敬孝（工67卒）、糸井文彦（経67卒）、石原敏雄（理70卒）の会員3氏が昨年末、1週間にわたって中国チベット自治区東部をランドクルーザーで駆け巡った。もちろん、単なる観光ではなく、目標の山を求めての旅だった。隊員の出雲路氏が報告を寄せてくれた。

◇

「年寄りでも登れる未踏の山なんて、もう残ってないだろうな」と、石原君と雑談を交わしたことがある。彼がチベット東部の踏査研究をしている中村保氏の講演会を見つけてきてくれて一昨年7月に聴講。そこで知ったのがこの地域だった。チベット自治区東部から四川省、雲南省の西部にかけては、京大の事故で知られる梅里雪山（6、740メートル）や、日中合同隊が登頂したナムチャバルワ（7、782メートル）などのほかにも魅力ある山々が多く、中村氏によれば150以上が未踏とのことだった。まずは見に行こう、登れそうな山が見つけられればと、昨年5月にツアーを計画したが、3月のラサ暴動のあおりで許可が出ず、年末になった。


チャラ峠で一行3人

【日程】12月20～21日＝糸井、出雲路　成田→成都▽石原　成田→上海→成都　成都泊
22日＝成都→ラサ（拉薩、飛行機）ラサ泊
（ここからトヨタランドクルーザーの旅、全走行距離約2、360キロ）
23日＝ラサ→パーイー（八一、林芝県）506キロ
24日＝パーイー→ポメ（波密）242キロ
25日＝ポメ→パシュ（八宿）228キロ
26日＝パシュ→チャムド（昌都）276キロ
27日＝チャムド→テンチェン（丁青）261キロ
28日＝テンチェン→ナクチュ（那曲）513キロ
29日＝ナクチュ→ラサ338キロ
30日＝ラサ→成都（飛行機）、石原は上海へ（同）
31日＝糸井、出雲路　楽山大仏、峨眉山観光（ともに世界遺産）成都泊
1月1日＝糸井、出雲路　成都→成田▽石原　上海→成田

【費用】成田―成都間往復航空運賃約12万円、成都以後一切約45万円（含む世界遺産観光）

【旅日記】

22日（晴れ）飛行機が30分くらい飛ぶと、雲海の中に海に浮かぶ小島のように山々が見えてくる。成都―ラサ間の航空路は今回のツアーコースのほぼ真上を通る。やがて雲海が切れ、左側の窓からヒマラヤ山脈の東端、ブータンとの国境稜線からナムチャバルワに至る山の連なり、所々に氷河を伴う鋭角に聳え立つ峻峰が見えた。ラサ空港にはガイドのドルジさんと運転手が出迎えてくれた。ともにチベット人で、

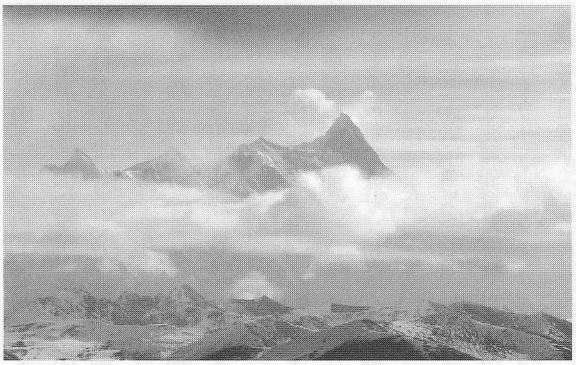
ドルジさんは日本語と英語ができる。いきなり標高約3、500㍍に立たされ、空気の薄さを感じるが、頭痛はない。ガイドがしきりに、走るな、急ぐなと注意する。気温はマイナス5℃前後だが、風がないせいか、寒さはそれほど感じない。

ランドクルーザーに乗り、ラサの街へ。有名なポタラ宮を見上げてジョカン（聖地ラサでも最も聖なる寺院で、チベット全土からラサをめざす巡礼達の目的地）に参拝し、拉薩神湖酒店に入る。出雲路は食事中に高度障害による頭痛と吐き気に襲われ、糸井に薬をもらう。石原は薬なしで問題なく、糸井も薬を飲んでいた。ちなみに、行程中のどこのホテルにもテレビがあり、携帯電話も谷底を除けばかなり通話できた。

23日（雲多し、一時小雨）この日以後、318号国道川蔵公路（南路）から214号国道経由チャムドまでを4日かけて走る。まだ真っ暗な7時半に出発。10時25分、ミラ（米拉）峠。標高5、300㍍の最初の大きな峠だが、高度障害はない。チベット仏教の経文を刷った大量のタルチョが翻っていた。ラサ側の乾燥した世界から峠を越えると植生が変わり、下るに従って樹木が豊富になる。

途中の村で昼食を取り、往復86㌔の寄り道をしてパソンツォ（八松錯）という湖へ。ラサから近いだけに観光化しているが、湖を囲む森と雪の山々が素晴らしい。湖から20㌔のジェシナラガブ（6、318㍍）など、いくつかの山が登頂されている。19時、香帕拉酒店に到着。標高約3、000㍍。ガイドは公安に登録に。外国人への非公開地域の旅行では宿泊地ごとに通過許可を受ける必要がある。

24日（雲多し、後晴れ）朝、町から近い柏樹王の見学に。樹齢2、000年以上のビャクシンのような針葉常緑樹が数十本残っている。王と言われる木は樹齢2、600年とのこと。そのあとセチラ、標高4、515㍍の峠へ。峠から100㍍ほど下がった所に展望台を建設中で、ナムチャバルワ山群が正面に。左に大きく離れてギャラペリ（7、294㍍）。最初は雲に隠れていたが、やがて槍のようなピークと稜線が姿を現した。急斜面に囲まれ、圧倒される眺めだ。峠を越えると一層緑が豊かになり、森の木々にサルオガセが下がる。石楠花もあり、3、000㍍以下になると竹林や、谷間に牧場の広がる緑の村が現れた。


セチラからナムチャバルワ遠望

約2、000㍍まで川沿いに下り、14時10分、タンメ（通麦）の吊橋。左からイゴンツァンポ（易貢蔵布）川、右からパルンツァンポ（怒隆蔵布）川が合流する。この北側がニェンチェンタングラ（念青唐古拉）山脈東部にあたり、多くの未踏峰が残されている。国内外の多くの団体が調査しているようだが、谷底を走る我々は直接見ることはほとんどできなかった。16時、ポメ（波密）の神鷹大酒店（2、700㍍）着。

25日（晴れ）頭が重く、テキパキと物事を処理できない感じが残る。糸井、出雲路はずっと酒を控えている。出発して2時間半、11時30分にラウ湖に到着。静寂のなか、時折、コーンコーンと湖面の氷にひびの入る音が響く。少し行って国道は湖と離れるが、ミャンマー国境に近づく湖沿いの道路もある。入り口に通行禁止の表示があるが、ここを入って行くと、チベット最大級とされる氷河のあるカンリガルポ（岡日嘎布）山群で、主峰はルオニイ（若尼、6882㍍）。ぜひ見たくてガイドに頼んだところ、「少しなら」と約4㌔入ってくれた。標高4、200㍍。こちもパソンツォに負けない風光明媚の地で、主峰は見えなかったが、湖の周りに連なる山々が魅力的だ。この山域は神戸大学が攻略中で、今年も中国の大学と合同学術登山隊を出す。

14時30分、アンジュラ（安欠拉）峠（4、461㍍）。峠を越えると再び樹木のない土色の世界に。15時30分、五体投地の巡礼達が街路で野宿をするパシュ（八宿）の西蔵八宿県政府賓館に到着。3、200㍍。

26日（晴れ）約1時間でヌージャン（怒江）本流との出合。標高約2、700㍍。孫悟空の出てきそうな土とガレの深い大峡谷を下ってゆくと、突然、合流点に。狭い谷底いっぱいに本流が滔々と流れ、両側は高さ何百㍍もある黒い岩壁が続く。道路はその中腹に刻まれ、谷底までより、向かいの岩壁までの距離のほうがずっと短い。しばらく下って両側の斜面がゆるやかになるころ、流れから離れて九十九折れの道を登る。4、500㍍の峠に着き、前後の山々を撮影したが、名前は分からない。ここから4、000㍍余りの高原状の地形が70㌔以上続き、チャムドの空港もある。

11時50分、峠を下りた町バンダ（幣達）で成都に向かう318号国道を離れ、214号国道に入る。広大な草原に黒いヤクが小さな点になって散らばり、集める時はどうするのだろうと思う。空港を過ぎると、ゆるやかな登りになり、4、572㍍のランラシャン（浪拉山）という峠に至り、ここから3、200㍍まで急降下。さらに、2、3㌔間隔で並流するメコン河の支流と本流の間の峠を越え、15時、チャムド（昌都）着、西蔵昌都飯店に入る。標高3、200㍍。チベット自治区東部の中心地で、ラサ同様に中国化が進んでいる。このホテルは気持ちのいいところで、エアコン代わりに温水を循環させている。

27日（曇り、晴れ間あり）朝、市内の丘の上にあるチャンバリンゴンパにお参り。古い寺院で、約1、500人の坊さんがいるとか。沢山の仏像、壁際の棚に積み上げられた仏典、とりわけ宝石の砂を使った砂曼荼羅には感銘を受けた。9時20分、チャムド発。この日から川蔵公路（北路）317号をラサに向かうが、ナクチュまでは悪路の連続だ。メコン河の支流、昂曲に沿って登り、流れを離れて峠へ向かう。にわかに道路が行き違いできないくらい狭くなり、道路にあふれる川の流れは凍って盛り上がり、大石を敷いた所があるなど、とんでもない状況になってきた。ラサ―昌都などを結ぶ中型の路線バスはこんな悪路もものともせず走って行く。

チャラ峠から峠道。遠望は検証未完

11時40分、チュクラ峠にたどり着く。標高4、500㍍。写真休憩。名前は分からないが、魅力的な山が連なる。ゆるやかに下って別の谷に入り、登って峠を越え、また下るというのを繰り返して19時45分、テンチェン（丁青）着。3、800㍍。ホテルは丁青迎賓館。部屋は水が全く出ず、エアコンも能力不足と最悪だった。

28日（晴れ、雲多し）行程が長いので、真っ暗な6時40分に出発。4、400㍍の峠を越え、8時50分、巴格でモルゲンロートの撮影。10時半、チャラ峠（4、800㍍）に到着。山の眺めがすばらしい。後日、地図などからブジャイカンリ（布加崗日）山群と推定した。正午ごろ、公安の検問所で「お茶を飲んで行け」と招かれ、バタ茶を頂く。日本人が珍しかったらしいが、30分以上無駄にした。このあと4、500㍍前後の峠を2つ越え、15時にバチン（巴青）を通過。急な登り下りはなくなったが、約3時間、丘陵地帯の登り下りを繰り返し、22時ごろ、最後の峠、江格拉（4、929㍍）を越える。ライトの照らす前方と天の川以外は見えない中を黙々と走り続け、23時15分、ナクチュ（那曲）の西蔵仲青塘拉大酒店着。標高約4、460㍍。今回の宿泊地では最高高度だった。

29日（曇、一時小雨）前日、翌日回しにしたせいで公安への届けに手間取り、出発は11時30分。ここからは109号国道青蔵公路。青蔵鉄道のナクチュ駅のそばを通り、線路に付いたり離れたりしながらラサに向かう。線路の反対側にニェンチェンタングラ山脈が連なり、谷あいに鉄道、道路、送電線、通信線がほぼ同じ方向に連なる。夏は一面の草原と思われる枯れ野原では無数のチベットナキウサギが巣穴から出たり入ったりしている。15時50分、ニェンチェンタングラ山（7、162㍍）を望む駐車場で休憩。18時半、拉薩神湖酒店に帰着。

30日（晴れ）8時半、ホテル発。青蔵鉄道のラサ駅を車から見て、9時40分、ラサ空港着。ガイド、運転手と別れ、中国国際航空便で成都へ。帰りの便は往路ほど空席がなく、写真は撮りづらかった。

◇

この地域に興味を持たれた方には、最初に紹介した中村保氏の三部作「チベットのアルプス」等を一読されることを薦めます。同氏が代表の横断山脈研究会、京都大学、東北大学、神戸大学各山岳会等のホームページでも情報が得られます。今後はこの地域での登山許可取得のための情報

収集や申請ルートの調査、的を絞った偵察的なトレッキング実現に歩を進められればと考えています。同好の士を募ります。

久しぶりの盛会
OUMC新年会

本会の2009年新年会は2月19日夕、大阪市北区の阪大中之島センター（旧歯学部跡）で開かれ、例年を大きく上回る28人が出席した。

大野会長から会創立60周年記念事業の候補について簡単な紹介があったほか、昨年春、大阪山の会のツラギ峰登山隊に参加した西川元夫会員（T57）が、半世紀ぶりに訪れたマナスル山群とネパールの登山事情の変化などについて話した。

出席者は次のみなさん。（会長以外は卒業年次順）

大野義照▽堺谷弘▽山本光二▽三枝礼子▽杢中勝▽木村裕一▽横井保枝▽高木俊夫▽宍戸元▽西川元夫▽石澤命久▽細見一仁▽坪井和子▽岡田博司▽広瀬貞雄▽五百蔵弘典▽大川和秋▽高田邦雄▽石浜高明▽原治左ヱ門▽黒田治朗▽甲田吉彦▽山田靖則▽大宅幸夫▽科野昌蔵▽奥山宏臣▽栃尾豪人▽三十尾誠（現役）

東京支部だより

チベット報告に関心

OUMC東京支部の2009年新年会は2月27日夕、市ヶ谷の「鮨乃家」で開かれ、13名が出席した。若手会員は業務多忙や転勤などで出席できない人が多く、また、メールアドレスが変わっているせいか、連絡が取れない場合も多く、参加者が少ないのが残念だった。

今年は、会創設60周年行事が予定されているので、予め、大野会長、山田事務局長から、大阪での新年会の資料や写真、チベット・雲南の山々の資料などを送ってもらい、席上、配布した。また、冒頭、昨年末にランドクルーザーによるチベットツアーに出かけた出雲路、石原両氏からスライドの上映があり、堂々たる未踏峰が多数あることに改めて感嘆した。

60周年記念行事は追って発表があるので注目してほしいこと、8月末の白馬集会は記念集会にもなることから多数参加してもらいたいこと、メールアドレスなどに変更があれば連絡してほしいことなどをお願いして散会した。

参加者は次のみなさん。（卒業年次順）

大島輝夫▽山本信樹▽兼清喜雄▽米林外茂男▽野田憲一郎▽村井忠雄▽前澤祐一▽横尾秀次郎▽出雲路敬孝▽石原敏雄▽田中喜樹▽井上太一▽佐野威和雄　（前澤　記）

創立60周年も話題に
夏の白馬集会

2008年度の夏の白馬集会は8月30日から長野県白馬村八方の「ホテル対岳館」（丸山徹也館主）で開かれ、19人が参加した。

初日は1階レストランで開会式と夕食のあと、別棟の「與兵衛倶楽部」へ。丸山庄司前館主が収集している山岳図書の書棚に囲まれて歓談が続いた。大野義照会長からは09年の会創立60周年記念事業について協力要請があり、意見を交換した。

2日目は八方尾根散策など自由行動。3日目は恒例の懇親ゴルフ大会が安曇野市のあづみ野カントリークラブであった。

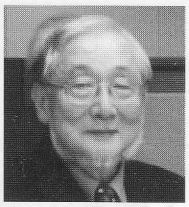
会長を除く出席者は次のみなさん。（卒業年次順）

田島汎▽山本光二▽宮本貞雄▽木村裕一▽宍戸元▽坪井和子▽兼清喜雄▽野田憲一郎▽田井英男▽大工原恭▽保母武彦▽三沢日出夫▽前澤祐一▽高田邦雄▽山田靖則▽田中喜樹

ネパール今昔
半世紀ぶりのマナスル山群

西川　元夫

昨2008年3月から5月にかけて大阪山の会のツラギ登山隊に参加しました。P29第1次隊以来、半世紀ぶりにマナスル山群の山や谷に再会、若き日を思い起こしつつ、過ぎ去ったその後の人生を振り返るに又とない素晴らしい日々をおくる機会を得ました。



関空から空路カトマンズへ向かったのですが、搭乗手続きの時も個人装備のつまったザックを背負い、無料手回り品限度いっぱいの共同装備の大きなバッグを手にしている以外は一般の旅行客と変わらず、半世紀前の海路での出発時に感じた悲壮感など全くなく、すこぶる気楽なものでした。

大阪山の会は毎年のようにヒマラヤに登山隊を出しており、どうしてそれが可能なのか、かねてから興味があったのですが、その答えの1つは大量の登山装備品をカトマンズにあるトレッキング・エイジェントの倉庫にデポしていることでした。1つの登山計画が終わると、使った装備品を点検手入れしてしまいこみ、次の隊が不足分を補充して使用する仕組みです。最近は、あらゆるブランドの大抵の用具が新品、中古品問わずカトマンズで揃えることができますし、キッチン用の大きなプロパンボンベも入手でき、この方策が可能となったようです。

食糧も原則として現地調達でした。カトマンズには、大きな駐車場をもつ大規模な商業施設のほか、日本の食材を専門的に販売する大型店舗もあって、特殊なもの以外は揃えられます。今回の登山隊では更に、新鮮野菜、米、穀粉、砂糖、卵、鶏、山羊なども計画の進捗に合わせてベースキャンプの地元で調達しました。ですから、これら装備と食糧の梱包作業もすべてカトマンズで行いました。私の頭の中に残っていた半世紀前のあのパッキングやパッキングリスト作りにせきたてられた姿とはまさに隔世の感ありでした。

この半世紀のわが国の発展振りは目覚しいものがありましたが、ネパールがいまだ1人当たり国民所得が200ドルあまりの貧しい国であるとはいえ、それなりの変化や発展が感じられ、いびつながら経済成長や社会資産の近代化も実感できました。開発には5カ年計画もあり、国家予算の半分以上をつぎこむ力の入れようですが、その6割が外国借款や無償援助頼みというのが泣き所ということでした。

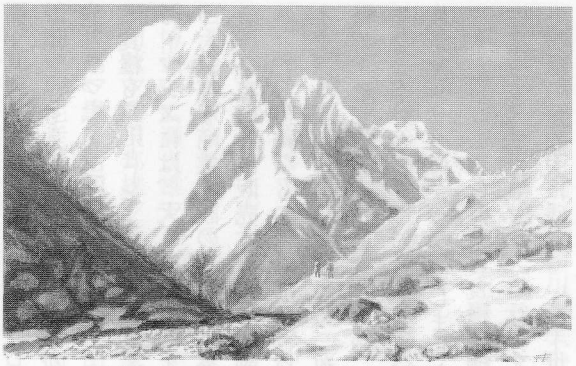
50年前、ポカラ空港からキャラバンで4日要したクディまで、今回はチャーターバスでカトマンズから昼食の休憩も含め8時間で到達しました。確かに、自動車が走れる道ができたことの恩恵は計り知れませんが、その建設工事は急斜面の中腹を発破で崩し、岩塊を谷へ落とし込む荒っぽさで、法面には今にも崩落しそうな岩を多く残したままです。迂回路がつけられないからか、工事中の通行止めもなく、こわがって前へ進めない馬がいたり、泊まっていたロッジの窓ガラスが発破の衝撃で割れたりしたこともありました。

環境問題は今やネパールでも重要視され、環境省や環境法が生まれ、国策として環境にやさしい行動をとるとうたい、登山者にも厳しい規制をしています。ゴミを出さなかった自給自足経済の国が商品経済へ移り、生活の利便とか避寒のため人が都市に集まり、スラムの拡大などの環境問題を激化させる一方、山岳地域では道路建設などによる環境破壊も捨てておけない段階にあると感じました。一方、道路工事に合わせて電柱を建て、電力線のほか大容量の同軸ケーブルを張る工事を準備している様を目の当りにして、人口希薄な国境地域でなぜ自動車道の建設とか通信設備の増強を急ぐのか、私には不可解でした。

ネパールでは10年間にわたったマオイスト騒動が収束して3年になろうとしており、観光客も着実に増加しているようです。政府は観光産業を経済発展の主軸にしようとしており、自動車道建設とは別に、古来からの通商路の改良も進めています。トレッカーや物資輸送の馬が歩き易いように道幅を拡げたり勾配を弛めたりする工事をあちこちで見ました。マルシャンディなど大きな川にかかる吊橋はすべてワイヤロープとアルミの歩み板の立派な吊橋に改良されていました。50年前にこの道をたどった時は、竹とツタでできた川の流れすれすれの吊橋を1人ずつ恐る恐る渡ったもので、第1次隊の帰路、サタレの橋が増水で流され、川留めにあったこともありました。

もう1つ目についたのは、改良された歩道沿いにロッジが数多くできたことで、それも政府の施策かと思えるくらい集落ごとにありました。申し合わせたようにガラス窓のあるカラフルな塗装の建物で、3坪くらいのツインルームがいくつかと椅子とテーブル式の食堂があり、多くは英語の名前がつけられていました。一方、茶店もテーブルと椅子の開放式に変わってしまい、キャラバンの途中、薄暗い店に入りこんで濁り酒を楽しんだ情緒はなくなり、寂しく感じました。日本も近代化の途中、古きよき事物を惜しげもなく捨て去りましたが、残念ながらネパールも同じ径をたどっているようです。

地域間の物資輸送手段は殆ど人夫から馬に変わっていました。季節差、地域差は大きいようですが、30キロ担う人夫の日当が平地で400ルピー（約450円）に対して馬は60キロで400ルピーですから、メリットは大きく、今回の登山隊でも大半は馬に託し、人夫は大事な荷物を運ぶための若干名に留めました。半世紀前はすべて人夫でしたから、管理やコストは大変でした。当時の日当は5～6ルピー。1ルピーが50円の時代ですから300円相当で、この50年間の「円」の価値の推移を見ても当時のコストの大きさがわかります。また、人夫には毎日煙草を与えることなども決められていて、篠田軍治先生の報告書「P29西面」にも山本光二先輩が煙草を支給されている写真があります。



ビムタンからのフンギ　え・西川氏

時代の移り変わりを感じたもう1つのことはネパール紙幣が奥地でも通用することでした。半世紀前は、なんとか通用したのはトンジェまで、それも高額紙幣とか汚れたのは駄目でした。そのためカトマンズで大金を小額紙幣と銀貨に両替して人夫の日当などに備えたのですが、このルピーを運ぶため人夫を2人増やさねばなりませんでした。

次に地図についてです。P29第1次隊の時は、当時、唯一信頼されていたインド測量局の地図でもツラギ氷河周辺は空白のままでした。そのためベースキャンプ予定地のP29西面内院へのアプローチルートが確定できず、本隊に先行して住吉仙也副隊長とともに偵察を重ね、8日目にスミヨシコルルートを発見したのでした。しかし、90年代にフィンランドの協力によってネパール全土の空中写真が完成し、ネパール政府測量局はこれをもとに2002年までに全山岳部の5色刷りの見事な5万分の1図を発行しました。

最後にシェルパです。元来、インドのダージリン出身で登山学校で教育を受けた者のほか、ソロクンブの高地に住み、英国のエベレスト登山隊などで作法や登山技術の教育を受けたシェルパ族をさしましたが、今やそれ以外の種族も多く、高額の現金収入を稼ぎ、殆どがカトマンズに住む都会人です。

半世紀前、政府はヒマラヤン・ソサエティなる組織をつくり、登山隊はそこを通じてしかシェルパを雇えない不便な仕組みにしてしまいましたが、今日ではNMA（ネパール・マウンテニアリング・アソシエイション）という組織が登録、教育、保険などを担当しています。シェルパには登山や旅行エイジェントに所属する者とフリーの者がいますが、登山隊が雇用する時はどちらの者もエイジェントを介する仕組みになっています。

P29第1次隊がツラギ氷河のアイスフォールに阻まれて計画の転換を余儀なくされた時、篠田隊長から、当時は6700峰と呼ばれていたツラギに登り、次の計画に備えてP29の偵察をするよう命を受け、勇躍初登頂も狙ってこの山の扉を開いたのが半世紀前の私でした。今や標高も7、059メートルに改められ、中部ネパールヒマラヤの未踏峰では最高峰であることも知り、今回の隊が登頂に成功すれば、人生の残りの時間を考える時、これに勝る喜びはないと心を躍らせていました。

私はまた、家族を支えることを理由に長い間、山のことを忘れた振りをしてきましたが、このこと以外にも70数年間の人生の中で遭遇した事柄にからむ「こだわり」を数々心のなかに抱えているようです。これらを初登頂の感激の力を借りてすべて消去してしまい、新鮮な素直な気持ちに戻って人生の締めくくりの季節を迎えたいとの願いを持っていました。しかし、今日までの流れと同じく今回もまた願いは叶わず、来シーズン以降の有縁の士の挑戦に望みを託すことになったのであります。

（1957年工学部卒）

熊野――高野山その2
藪山さまよい悪戦苦闘

横尾　秀次郎

「おい、岡久」「どなたでしたか」「オレ、オレ」――。熊野古道を高野山までという山行は、岡町商店街での10年ぶり、それも偶然の再会を機に岡久君を仲間に引き込んで、4人で前年の続きを実行に移した。今回は、まず前年は途中で引き返した牛廻山に達し、尾根伝いに西中で1泊。翌日、三浦峠、三浦口を経て伯母子岳の手前の水場でキャンプ。その翌日に大股へ下り、高野山に達する、という2泊3日の計画である。1日10時間行動と予想されるだけに、可能な限り荷を軽くしようと宿泊予定地に食糧やテントをデポすることにしたので、荷物は10キロ強に抑えることができた。

伯母子岳頂上で

【期間】2008年11月2日～7日

【メンバー】前澤祐一、大川和秋、岡久光明、横尾秀次郎

2日　早朝割引の東名高速を飛ばし、亀山、天理を経て、9時ごろ、大和八木駅で大川、岡久と落ち合い、十津川街道を南下する。2週間前に途中が山崩れで通行止になり、数日前に迂回路が整備されたばかりで、15時、十津川温泉着。そのまま、翌日の宿泊予定地である西中まで車で行き、吊橋のたもとの松下さん宅に食糧、テントを預かってもらう。民宿松乃家泊。

3日　前年の引き返し地点の古谷川出合まで地元の方の車で送ってもらい、7時出発。牛廻山のコルからの尾根に取り付き、9時半に引き返し地点に着く。厭なトラバースを慎重に終え、10時にコルに出る。広い林道が通っている。牛廻山（1、206メートル）を空身で往復し、11時30分、林道を東に向かうが、林道はやがて消滅し、あとは尾根筋を見失わないように地図と磁石と、笹に隠れた微かな踏跡を頼りに進む。途中、地図上でも三本松と記載されている杉の巨木を通過する。丸尾山への登りは道は判然とせず、地形だけが頼り。16時、丸尾山と墨書された木片の残る頂上（938メートル）に着く。西中に向かう尾根の笹藪を下ると、明瞭な山道に出た。

この道を東に辿るが、ほとんど水平道で、途中、出谷小学校跡の標識を過ぎる。ヘッドランプの中、現在地が分からぬまま、「昴の郷、十津川温泉」という小さな表示の方向をひたすら進む。下りになり、谷筋を辿ると、闇の中に突然、巨大な吊橋が現れた。長さ約100メートルの橋を渡ると自動車道に出た。闇夜から現れた車を止め、現在地を聞くと、昴の郷のすぐ近くと分り、親切に西中まで乗せていただき、19時30分、松下さん宅着。デポのおかげで生野菜のサラダや晩酌付きの豪華な夕食。

（後日の検討の結果、迷ったのは、丸尾山の下りで南を走る巻き道に入り、天上山へ行くルートとは違う方向に進んだからであった）

4日　7時半出発。矢倉集落から登山道に入り、昼前、三浦峠で昼食。14時ごろ、三浦口に着く。三田谷から伯母子岳への登山道に入り、尾根の東側の巻き道を進む。16時、左手から急な小さな沢が入り、そこをキャンプ地とした。テントを張る余地はなく、各自ツエルトやテントカバーをかぶり、寝袋などにもぐりこむ。満天の星。夜中、沢の上を鹿が何度か警戒するような鳴き声を上げながら通り、岩屑を落としてゆく。

5日　5時出発。道は深い枯葉で覆われ、所々、上から崩落した岩屑に覆われた所のトラバースを強いられ、

「これが熊野古道か」「整備がなってない」と毒づきながら上西家跡のある平坦地に近づいた時、「こちらは小辺路道ではありません、wrong way」というベニヤ板が……。それも我々の来た方向とは反対を表にして木にくくりつけられ、赤いビニールテープがバツ印に張られているのを見て、のけぞってしまう。我々はwrong wayを登ってきたのだ。鹿も不審に思ったはずだ。尾根筋に新道が出来ているらしいが、登山口には何の表示もなかった。

11時ごろ、伯母子岳（1、260㍍）着。下りにかかると、私の右膝が痛み出し、速度が上がらない。長い下りを大股で下ったときはすでに14時近くになり、当日中の高野山到着は不可能であった。大股はかなり大きな集落だが、昼間は全く人気はない。そんな中のある家に少し足の不自由な老人がおられ、事情を話すと、突如、快人物に変身。「任せておけ」と大型4駆を運転し、難なく高野山まで運んでくれた。かくして今回の熊野山行の終了となった。

その夜泊まった宿坊、高室院の精進料理は新鮮な材料を使い、すばらしいものであった。翌6日は、午前中、御廟に参り、山内を散策した後、タクシーで十津川街道の夢の湯まで行き、バスで十津川温泉へ戻った。途中、奈良県内在住の桑原昭夫、高田邦雄両君が合流し、松乃家で大いに楽しい時を過ごした。

7日は初日に苦労した昂の郷の吊橋付近に立ち寄ったが、吊橋は、登山靴を脱いだ状態では下りるのもためらわれるほど急で滑りやすい斜面の彼方にあった。

あとは五条方面に帰る皆と別れ、前澤氏と2人で新宮へ。熊野速玉大社に参り、尾鷲―亀山経由で横浜に帰った。

◇

徒歩で高野山までという目標は果たせなかったが、2年にわたって仲間と熊野を歩き、思い出深い山行になった。今回もコースを踏み外して藪山をさまよったのだが、地形を観察し、地図と磁石を頼りに歩くという本来の山登りができたと思う。また、地元の人達から経験談や今の生活についての話も聞け、いい旅をした気分になっている。

（1964年工学部卒）

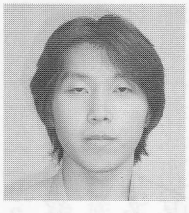
大阪大学山岳部活動報告

2008年度

リーダー所感

三十尾　誠

2008年度の活動は4年生部員3名、うち合宿は主将と前年秋入部の1名で実施した。人数的、また4年生だけの構成による時間的制約の中にあっても活動の質を低下させまいと、合宿ごとに新たな挑戦を含んだテーマを持たせるよう心がけた。



春の新人歓迎合宿では、OB諸氏のご協力によって新人に初歩的な雪山を経験させながらも、雪稜に加え、岩壁を含むよりレベルの高い登攀を実践することができた。夏の定着合宿では、カムやナッツ類を用いたクライミングを目標にかかげ、小規模ながらも質の高いクライミングを志した。こちらもOB諸氏のバックアップがあって初めて実行にこぎつけられたもので、改めて感謝の意を表したい。

体育会系部活動全般の人気低迷もあるのか、近年、山岳部も部員数減少が目立っている。また、残念なことに、せっかく入部しても本格的な活動を経験する前に退部する例が見られる。新入生には何を差し置いても、まずは立ち向かってみる、挑戦心のある者を期待したい。

◆新入生歓迎合宿／涸沢定着

【期間】5月2日～6日

【参加者】三十尾（CL）、山田、OB諸氏（榊原、宮田、大倉ほか2名＝順不同）

2日　入山

上高地発（16・50）―徳沢キャンプ場（18・20）

3日　涸沢入り、雪上訓練

徳沢キャンプ場（6・30）―涸沢（11・20）―雪訓（14～17、アイゼン歩行・滑落停止・支点構築・スタンディングアックスビレイなど）

4日　北穂高南稜、東稜

南稜＝三十尾、山田、宮田ほか1名

涸沢（6・10）―北穂高頂上（9・10）―下山・雪訓―涸沢

東稜＝榊原ほか1名

5日　前穂高北尾根、白出しのコル

前穂高北尾根＝三十尾、榊原、大倉

涸沢（3・10）―5・6のコル（4・40）―4・5のコル（5・50）―3・4のコル（7・20）―看板のあるコル（11時ごろ、前穂高通過後）―岳沢にエスケープ（12・40）―上高地（14・30～15・30）―涸沢（20・20）

白出しのコル＝山田、宮田ほか2名

前穂北尾根のアタック日なのに早朝からガスが出て、終始、視界不良。

このため前穂登頂後、吊尾根を渡って白出しのコルで合流する予定が、岳沢にエスケープして上高地回りで涸沢に戻る運びとなった。入山を2回も行うことになるとは予想していなかった。帰着までの17時間はさすがに歯ごたえがあった。涸沢に戻るころには体がすっかり冷え切ったが、温かい食事で出迎えてくれたのは大変ありがたく、頭が下がった。何より、目標であったⅢ峰の岩場のリードができたのはOBの方々のご協力の賜物と改めて感謝したい。

6日　下山

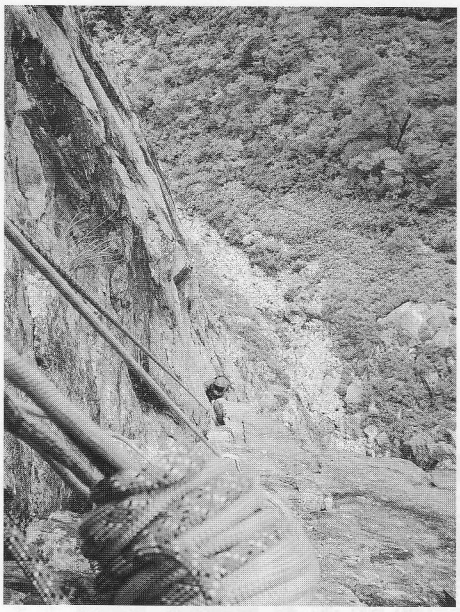
涸沢（8・00）―上高地（13・00）

◆北アルプス錫杖岳定着合宿

【期間】8月20日～23日

【参加者】三十尾、山田

20日　中尾高原口より入山



錫杖岳の登攀

21日　降雨で停滞

22日　前衛フェース北沢側フランケ「注文の多い料理店」4級上

23日　下山

×　×

▽ルートの記録　「注文の多い料理店」＝6ピッチ、160m、核心部Ⅵ級＋

1ピッチ目（Ⅳ級、40m）　大テラスに向け、巨大な階段状の草付きフェースを右上。ビレー点を除けばルート上に残置支点が存在しないため、小型のカムやナッツで支点を取りながら進む。

2ピッチ目（Ⅴ級、30m）　大テラスから左に向かう広めのクラックをたどり、凹角の左側にぶつかるあたりで右上に折り返し、フェースへ。フェース部分でも剥離した岩板の内部にカムをセットすることは可能。

3ピッチ目（Ⅵ級＋、25m）　2ピッチ目を終えたテラスのすぐ上方に広がる、幅の広いクラックが切れ込んだハングを越える。ハング上部にも幅広のクラックが続く。傾斜は落ちるので難しくはないが、セットできるカム類が限定される。

4ピッチ目（Ⅴ級＋、20m）　3ピッチ目の終了点は非常に狭く、セカンドとの入れ替わりに苦労する。幅広のクラックが切れ込んだハング越えから開始するが、フットホールドがあるので、3ピッチ目よりはずっと易しい。延々と幅広のクラックが続くので、相変わらず支点は取り難い。

5ピッチ目（Ⅴ級＋、40m）　テラスから少し上がった先に、幅広のクラックと広めの指幅のクラックが並列したフェース。さらに上部で茂みにスリングを巻き付けて支点を取りながら草付きを突っ切ると終了点へ。5ピッチ目を終えた時点でルート終了とし、懸垂で下降。

◇

今回の合宿では、カムやナッツ類によるフリークライミングスタイルでのマルチピッチクライミングをテーマにすえ、目標ルートとして錫杖岳の「注文の多い料理店」を設定した。結果的には、途中でトップがロープに体を預ける場面がありながらの終了点到達となった。難易度からすれば個々のピッチは十分クリアできるものであったと考えるが、複数ピッチにわたるクライミングでは、長期的に安定感のある登りを維持できることが重要と感じた。

会員の近況

（白馬集会や新年会の出欠はがきから抜粋。その後の変動などは未確認。卒業年次順＝西暦。敬称略）

加藤　幹太（理52）　私と共に山へ行った人たちが他界されてゆくのは淋しい限りです。久保君も立派な人でした。小生は見かけは元気ですが、いろんな所に欠点があり、月1回は滋賀医大へ通っています。現役の会員が増えることを祈っています。

堺谷　弘（理53）　一昨年と昨年の2月に西成区民ミュージカル（素人）に参加しましたが、昨年3月には豊中の劇団ウエスト（プロのミュージカル）のオーディションに合格し、週2、3回の練習に通っています。一昨年は芭蕉の「奥の細道」の前半、東京から松島、平泉、真室川まで700キロをマウンテンバイクで走り、昨年は山形県の酒田から新潟、福井、京都、大阪まで後半900キロを走りました。今年は「更科紀行」の道（中山道）をやる予定です。

二木　節夫（工54）　まあまあ元気に暮らしています。しかし、膝に少々ガタがきていますので、山に登るのもゆっくりしか歩けません。それでも時々、山好きのグループ（会

社のOBたち）と低い山を楽しんでいますが、頂上に着くのにいちばん遅れるのが私です。いちばんの長老ですので、みんな大目に見てくれています。

岩永　剛（医55）山どころか、少しの坂道でも息切れがします。それでも、山の写真を見ると、興奮します。

三枝　礼子（薬55）最近まで「他人事」とみなしていた「高齢者に多い症状あれこれ」が、とみに「自分の事」になってきました。慣例のようにしていたカトマンズ往復はもう控えることにしました。

辻川　真（経57）坂や階段を登ると右脚のサラが痛み、いよいよ年貢の納め時かと思い始めました。スキーは立っていて腰を振るだけで支障がないのは有り難さの極みです。OUMCの中で絵画愛好会をとの話は女帝様に賛同いただけるかどうかが決め手になっています。うまく発足できればうれしいですが。

石澤　命久（歯57）最近やっと「サンデー毎日」の生活になじんできました。小さな庭ですが、楽しんでいます。「酒とバラの日々」と思っております。1月に蔵王、2月に富良野とスキーの予定があり、正月の餅腹をトレーニングでいかに鍛えるか大変です。老人は、やり過ぎると痛みが出たりします。とにかく歩こうと毎日がんばっています。

野田憲一郎（経60）昨年6月、大阪の街で山本彰三君とバッタリ。神戸で三沢、梶本、大川3君と会うと言うので、予定を変更して一緒に再度山麓のレストランで昼食、街を少し歩いて別れました。偶然の出会いでした。5月連休は前澤、米沢、横尾、井上君と蝶―常念へ。雪多く、高温でしんどかったが、槍穂高が絶景でした。

「P29日記」を発刊　1961年の第3次P29遠征隊に参加した**玉井康雄**さん（理61）が、遠征中の自らの日記をまとめた「P-29登高日記」を自費出版した。出発から帰国まで克明に書きとめたのを忠実に復元したもので、「大阪大学山岳会　P-29第3次遠征隊に参加して」の副題がついている。写真、ルート図をふんだんに添えており、A5判、249ページ。限定部数のため、遠征隊員らにしか送っていないので、玉井さんは「興味のある方は元隊員から借りるなど、回し読みしてほしい」と話している。

広瀬　貞雄（工61）幸い、健康に恵まれた日々を過ごしております。3年前から乗り始めたギア付き自転車クロスバイクが快適です。今年は大分と宮崎の県境にある祖母岳、傾岳に登りに出かけたい。学生時代からの念願です。

村井　忠雄（工61）登りのないスキーだけでも、と年5、6回、延べ20日前後出かけております。2007年には阪大工業会の同好会として故久保三郎大先輩と志賀高原・薬師の湯などにご一緒でき、私が新人の時に寝袋などをお借りしたご縁も含め、楽しく語らい合えたことが思い出されます。あんなにお元気だったのにと本当に残念です。

白井　達郎（工62）技術コンサル業を続けていますが、私のところのようなささやかな業務にも不景気の影響が大きく、開店休業状態です。

梶本　孝治（工63）体調は良くなっているのですが、血圧でイエローカードを出され、寒い間は神戸背山、我が家の奥庭散歩は冬眠中です。陽気が戻れば、せめて芦屋ロックガーデンなど青春の墓標とも言える岩場へは行きたいのですが……。〃古き山屋〃としては、近所の神戸市文書館（旧南蛮美術館）の保存文書に、居留地時代に六甲山を開拓した外国人仲間の会報や山歩きのニュースがあるので、週末はポットにコーヒーを詰めて通い、ボケ防止に努めています。

宇野　雅明（医64）町医を続けており、時々、六甲山や金剛山を歩いています。ゴルフではカートに乗らないようにしています。

大川　和秋（工64）最近、学生時代に比べて身長が4、5チン縮んでいることに気づきました。どのくらいまで、どんなペースで縮むのかなと正確にデータを取ってみようと思っています。28歳の時にたった1球で傷めた野球肩が昨年、鍬仕事で再発。その右肩に休養の時間（リストラでなく）を与えようと左手作業の機会を増やすことに挑戦しています。自分の脳の混乱と、それから脱却・進化していく時の身体のバランスがある程度わかり、結構面白いです。数年、訓練してみます。

吉川　信也（理65）老骨にむち打って日夜、働いております。

大野　義照（工67）平成20年の山行。5月連休＝一の沢から常念岳。8月＝三伏峠を経て塩見岳。いずれも1泊2日、小屋泊まり。塩見岳では雪に迎えられました。9月＝北海道・幌尻岳。徒渉20回、日帰り。

原治左ヱ門（理67）定年後5年間は横浜、大阪、名古屋、上海と4拠点を巡っていましたが、少々疲れてきたので、今年1月に横浜の家内と

共に大阪に戻りました。今後は100％大阪ベースでやっていきますので、お付き合いのほどよろしくお願いいたします。

黒田　治朗（医69）今年はいよいよ現役を半分退くつもりです。ゴルフなど趣味の領域に首を突っ込むことにしています。

畑中　薫（医69）中国自動車道赤松SAのすぐ北にある有馬高原病院（精神病院）へ、毎日2時間、電車3つとバスを乗り継いで通勤しています。精神異常の人々が増加している昨今、正常化へ向けて私なりに働けることに満足しています。

中岡　和哉（医71）昨年、梅池のヘリスキーに夫婦で行きましたが、乗鞍の大斜面を登る気になれず、そのまま滑り降りました。年ですね。石原君、大宅君ほか皆様の元気な便りに驚いています。

大宅　幸夫（歯76）今年、還暦を迎えてしまいました。患者さんと話していたら、「60歳は本厄やから、厄払いをしとかなあかん」。すでに昨年夏、山で脚をくじいてから、あまり良いことがないので、「払っても、もう遅いかな？」と。あ、どうも、愚痴ってしまいました。

奥山　宏臣（医84）昨年4月より兵庫医大の小児外科に勤務しています。病院は武庫川の河口近くにあり、北側には六甲山がきれいに見えます。最近は時々、金剛山などに登る程度ですが、今年は北アルプスに行ってみたいと思います。

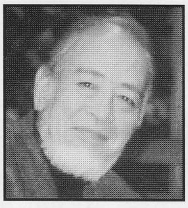
畑　秀信（人84）四川大地震で東チベットへ行けなくなりました。再挑戦です。今、キルギスタンのパミール山系が面白そうです。まだ日本人の記録はありません。

河野　美樹（医05）平成20年5月に転勤になりました。2年間、東京は青梅で働きます。折を見て奥多摩の山などで気分転換できればと思っております。

渡辺　景子（基礎工05）両親が山歩きを始めました。私より父親のほうが元気なので、ガイド役は務まりません。うれしいのか、さみしいのか、複雑な気持ちです。

追悼

関本　靖裕氏　2008年9月18日、がん性の腸閉塞で死去、75歳。1956年、理学部物理学科卒。現役時代は厳冬期の鹿島槍東尾根合宿などに参加された。卒業後は日立金属に入り、ロサンゼルス駐在などを歴任。自宅は豊中市。



山小屋愛した才人

木村　裕一

昨年9月19日、久しぶりに関本君からメールが入った。いつもの囲碁の手合わせの相談だろうと読むと、どうもおかしい？「お世話になっていた父が……」。末尾の「関本守」の名前を見て愕然とした。

7月に天満で開かれた西川元夫君のマナスル山域ツラギ峰遠征報告会で会ったばかりだった。「上海とトルコへ行ってきた。大阪は暑いので、しばらく〝おやま〟（山小屋）へ行ってくる」と言っていたのが最後の会話になろうとは思わなかった。

彼は3年前にすい臓がんと診断されたが、早期発見だったので比較的軽い手術で済み、術後は以前の体調に戻ったように思われた。再び、奥さんと海外旅行に出かけては土産話を聞かされたものだった。そして「脳の活性化によいので囲碁をやろう」と言い出して、以前にも増して対局するようになった。

彼とは1952年（昭和27年）入学の同期で、学部は違ったが、直ちに山岳部へ入り、いろいろな山行を共にした。その中で最も印象に残るのが55年の冬山合宿である。当時、部員が充実していたのをベースに14名が双六・笠・鷲羽岳への放射状登山と黒部源流踏破を計画する壮大なもので、毎日新聞の記者が同行取材し、正月紙面に5枚の写真入りで報道された。が、結果は惨憺たるもので、12月25日に入山し、1月13日に麓の中尾集落に帰るまで、行動できたのは5日に満たなかった。その長かった停滞の日々、水のようなお粥や1食2枚の食パンで飢えを凌ぐ中で、下山後の食事から人生哲学までを語り合った。撤収日の行動も早朝から翌日にまたがる悲壮なもので、スキーの調子の悪かった関本、西川、片山の3君は雪崩の巣のような大沼沢の真ん中でビバークしたことなどは終生忘れることは出来ない。

関本君は阪大山岳会では数少ない楠本賞（理・物理）を受賞した秀才で、杢中勝君（工・造船）と合わせ同期で2人も受賞したことは驚きであり、誇りでもあった。日立金属では、福岡勤務中に九州大学で工学博士号を取得したり、東京在勤中にはNHKの上級英語会話の番組にゲスト出演したりして我々を驚かせた。定年退職後はニュージーランド国立技術研究所の日本代表として医療機器の日本への輸出に貢献した。

東京在勤中の80年代後半、奥蓼科に山小屋建設を決心し、後輩の故木原秀幸君や田中喜樹君の協力を得て、ほとんど手づくりで数年がかりで完

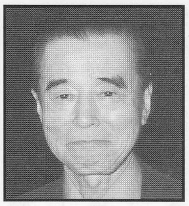
成させた。カナダから取り寄せたご自慢のストーブの脇の壁には三枝礼子さんがP29遠征時に描いた25号の絵が飾られている。

彼はこの小屋をこよなく愛し、夏の避暑はもちろん、春の草花の芽生え、秋は真紅や黄金に彩られる木々の佇まいを存分に楽しんだ。これからは奥様や子供さん、お孫さん達が〝おやま〟に集まり、彼を偲ぶのを天国から眺めることだろう。

（1956年経済学部卒）

川島　勇氏　2008年6月3日、死去、79歳。

（前号で既報）



激しく燃えた4年間

山本　光二

1950年（昭和25年）の阪大山岳部入部者の中に3人の旧制高校卒業生がいた。年齢順に住吉仙也（岡山の六高）、尾藤昭二（大阪の大高）、川島勇（岡山の六高）の各氏である。尾藤さんは2001年に他界、今また川島さんが昨年6月に逝った。

山岳部入部の時、川島さんに初めて会い、その日のうちに旧制神戸一中で私の2年上級であったことを知った。中学4年から六高に進学しているので、随分とゆっくり旧制高校を楽しんだものだ、と笑い合った。

六高卒業生の2人は戦時中、共に剣道部に属したが、敗戦で剣道はできなくなり、揃って山登りに転向すべくやってきた。　2人とも個性的ではあるが、ウマが合う仲であった。入部後すぐ、川島さんは住吉さんに「旦那」というニックネームをつけ、今に至るも通用している。

山岳部の活動が始まるや、彼はエネルギッシュに岩登りの練習を始め、土曜日になると電話があり、翌日は六甲や道場の岩場で、日が暮れるまで岩に取り付いた。こうした努力と天性の運動神経とが相まってザイルのトップにふさわしい実力を身につけていった。それが実績となって表れるのは52年夏の鹿島槍カクネ里合宿だった。尾藤リーダー、川島サブリーダーの下、13名が参加し、川島、坪井両氏による直接尾根初登攀をはじめ北壁のほとんどのルートを登り尽くした。この山行で既に第一級のクライマーに成長した川島さんの力量が皆を引っ張って成果を収めさせたことは言うまでもない。

翌53年3月の春山では、宿願であった積雪期の後立山全逆縦走が行われた。川島さんは住吉さんと共にアタック隊員を務めた。2人とも地形と気象を熟知したコースであったが、半月にわたる雪と氷の国境稜線踏破であり、記録的にも優れたものであった。六高の旧友同士のアタック隊は成功裡に計画を達成した。

そして、この年の年末から翌年初めにかけて、川島さんはチーフリーダーとして厳冬期穂高・槍の極地法による往復縦走を行った。計画はギリギリのものであったが、参加メンバーの体力、技量、判断力の総和が部発足以来のピークに達していたことに加えて、いくつかの好運に恵まれ、川島、尾藤両氏は穂高・槍の往復に成功した。

何事にも一途になる川島さんであったが、54年に住友石炭鉱業に入社後は大きな山行に参加した話を聞かない。その頃すでに石炭から石油へのエネルギー転換は進み始めていた。その中で赤平炭鉱に赴任した彼は仕事に没頭したに違いない。さらに日々の生活の内に人生の目標を見極めるべく渾身の努力を尽くしたであろう。炭鉱の閉鎖がほぼ終わり、川島さんは役員に就任し、千葉の佐倉に往むようになって、白馬村の会合に参加するようになった。

暫くぶりの夏の日に見る彼は血色が良く、年齢より若く見え、八方尾根を歩くのは私より速かった。しかし、このような楽しい時は長くは続かなかった。彼の肝臓疾患は深く静かに進行し、昔好きであった酒も再会後は一滴も口にしなかった。やがて夏の会合も欠席がちとなり、遂に帰らぬ人となった。

この人の登山歴を見て感じることは、行動の期間が在学中の4年間に限られ、その短い間に深く思考し、激しく実践して、余人の到達困難なまでの実績を残し、登山の現場から静かに去った人だということである。ただ、川島さんはその後の人生を無為に過ごしてはいない。職場では業務実績を実現して社会に貢献し、自らの家庭をはじめ多くの関係者の利益を守って義務を果たし、社会的地位にふさわしい実りを残した。吾々は川島勇氏の全人格を尊敬し、友人であったことを誇りとするものである。

（1954年法学部卒）　合掌

編集後記

OUMCの中でチベット人気がにわかに高まってきました。ランドクルーザーのツアーが今後どう発展するか、見守りましょう。西川さんの「ネパール今昔」は新年会でお話を聞いて、急きょ、お願いしたものです。原稿は何でも歓迎。特に、若い方の寄稿を歓迎します。（会報担当・高田邦雄）